

僕には想い人がいる。

彼はいつもぼんやりと外の景色を眺めている。

その横顔は、何故かいつも哀しそうだ。

「裕介！」

チャイムが鳴って、授業が終わってもぼんやりと外を見ている想い人、裕介に声をかけた。

「……あ、伊藤くんか。どうかした？」

「今日はスタバの新作の発売日なんです！一緒に行きませんか？」

裕介は、困ったように眉をひそめた。

「ごめん。伊藤くん。今日は先約があつてき……」

「先約？ 誰ですか？ それ」

嫌な程に聞き覚えのある声がした。

「げ……アリババ……なんだよ……急に」

アリババは俺の前にくると話を切り出した。

「風の噂で聞いた。恋人が出来たらしいな」

「はあ？突然なんなんだよ」

「どこのどいつだ」

「はあ？」

「どこのどいつだと聞いているのだ」

「たとえ出来たとしても、なんでお前なんかに教えなきゃいけないーんだよ！」

アリババは黙り込んだ。

麗らかな木漏れ日の中、俺は二人分の洗濯物を取り込んだ。

「梅さんの匂いか……」

洗濯物を畳みながら、以前伊藤くんが言っていた言葉を思い出した。

「不思議なんですけど、同じ柔軟剤で洗っているはずなのに

梅さんの洗濯物は梅さんの匂いがするんです！」

子供のように目をキラキラさせて握りしめているのは、

俺のパンツという頭のおかしな光景が、脳裏に浮かんでいた。

伊藤くんに洗濯物を取り込むのを任せれば

必ずと言っていいほど、俺の服の匂いを嗅いでいる。

同じ柔軟剤で洗っているから、伊藤くんの服と同じ匂いしかないはずなのに。

「櫛木櫛木って……そんなに櫛木さんが良いんだったら、
櫛木さんと付き合えばいいじゃないですか！」

堪えていたものが溢れ出てきた。

泣くつもりなんてなかったのに、涙がとまらない。

「伊藤くん……」

梅さんは手をさしのべ、俺の手を握ろうとしてきた。

俺は咄嗟にその手を払ってしまった。

梅さんが苦しそうに悲しい顔をした。

その顔を見た瞬間、後悔の念が押し寄せてきた。

「あー……もう！ 梅さんの馬鹿っ！」